

**強制発情させられる教師と生徒**

**～ゾンビハザード編～**

「我々ハ宇宙人ダ。ココハ宇宙船デアル」

銀色に輝く機械の身体が、頭部のスピーカーから片言めいた日本語を響かせた。

声の主は巨大な鉄塊に手足と頭がついた、異様な外見をしている。胴体は太い筒状で、球体状の関節部を介して四肢が伸びており、丸い頭部には赤いレンズがふたつ嵌(は)め込まれていた。

「我々ハキミタチ人間ヲコウシテ保護シタ」

レンズの下の口元にあたる部分に小さな穴がぷつぷつと開いている。どうやら金属的な響きの声はそこから流れてくるようだった。

(な、なんなんだよ……)

中肉中背の男子生徒——壺条駆(いちじょう かける)——は、ぽかんとして目の前の異様極まりない存在を眺めた。

彼の近くには、同じように呆然とした顔がふたつ並んでいる。いずれも壱条と同じ学園に所属する教師と女生徒である。彼らはこの奇妙な物体が現れる直前、突如出現したゾンビの群れに追われて学園内を逃げ惑っていたところだった。

「急展開の連続で、何がなんだかさっぱりわからないけど……」

そう言って、切り揃えた黒い髪ごと首を傾げたのは、壱条のクラスの担任にして英語科の教諭でもある恋水心亜(こいみず ここあ)だった。

「えっと……、つまり、あなた方宇宙人が私たちを助けてくれたってこと？」

「ソノトオリ。人間トイウ種ヲ絶滅サセルノハ、アマリニ惜シイ。某惑星ノ策略ニヨリ同時多発的ニ散布サレタゾンビ化ウイルス。コレ、地球ノニンゲン絶滅サセルノニ100時間モイラナイ」

ロボットみたいな宇宙人が、頭部のスピーカーを通して答えた。

と、これまで押し黙っていた巨軀の女生徒——蛭沼麻衣(ひるぬま まい)——が一步前に進み出る。彼女はその体格に似つかわしい野性的な声で言った。

「要はオデたち、もう地球に戻れないってことか？」

「ソウダガ？」

宇宙人はこともなげに肯定する。

それを聞いた蛭沼の顔が、みるみるうちに青ざめた。無理もないことだろう。なにしろ突然現れた異星人によって、自分たちの故郷はあと百時間以内に滅亡すると宣告されたのだ。平静でいられる方がどうかしている。

壺条もまた顔面蒼白になって、ズボンのポケットに手を差し入れていた。スマートフォンを取り出して、震える指先で画面をタップする。上部に表示される「×」マークは、ネットワークへの接続が不可能であることを示すアイコンだった。

(くそっ。バイト代を注ぎ込んで課金したソシヤゲがもうプレイできないなんて……)

遅れてやってくるのは、家族や大切な友人に二度と会えないという喪失感だった。それは胸の奥底にある柔らかい部分を無遠慮に引き裂き、冷たい絶望となって心を蝕んでいく。

呆然自失のまま立ち尽くす壺条を現実に取り戻したのは、

「エツツツツツツツ」

という心亜先生の鋭い叫びだった。

壺条たちがいる空間は、劇場を思わせる半円形のホールだった。高い天井には照明があるほか大小様々なパイプが這っており、壁には無数の小窓付きドアが並んでいる。そして、心亜先生はそのうち一枚のドアの前に立って、信じられないものでも見るようにその綺麗な瞳を見張っていた。

「なんだ」

蛭沼が大股で歩を運び、心亜先生の隣に立つ。壺条も緩慢な動作でふたりに近づき、小窓から中を覗き込んだ。

耳をすませば、男女の睦声が聞こえてくる。純白のシーツが敷かれたベッドの上で、一組のカップルが互いの身体を抱きしめ合い、情熱的に唇を合わせていた。ふたりとも生まれたときの姿で、相手の肉体を確かめるかのようにゆっくりと撫でさすったり、指を這わせたりしている。

「オデ、男には見覚えがあるぞ。高城泰弘（たかじょう やすひろ）っていう、新任教師だ。何度かぶち転がしたことがあるから間違いない」

蛭沼の言葉に、心亜先生がこくこくと頷いた。

「女性のほうは用務員の太田原恵（おおたはら めぐみ）さん。たしか定年退職間近なんだけど、校長もなぜか頭が上がらない謎の存在なんだよね……」

心亜先生は言い終わると、首を巡らして背後のロボット型宇宙人を見やった。

「この光景について詳しく説明してもらえますか？」

「人間ヲ絶滅サセルノハ惜シイト言ツタハズ。ダカラ繁殖サセテ、増ヤシテヤルノダ」  
機械的な声音が、とんでもない台詞を紡いでいた。

途端、心亜先生の頬がカアッと赤く染まる。

一方の蛭沼は不思議そうな表情を浮かべて、

「太田原という用務員は定年間近の年齢だろうか？ 子どもなんて作れそうにないが」

「ソレガ大丈夫ミタイナンド。同人誌トヨバレル書籍デ勉強シタカラナ」

さらりと言つてのける宇宙人を前に、さしもの蛭沼も言葉を失ったようだ。

壺条は額に汗を浮かべながら、

「あの一、ひとつお聞きしたいんですが……まさか俺たちにも同じことをしろとか言うんで

すか……?」

おそるおそる尋ねたところ、

「言ウ。種ノ保存ハアナタ方ノ義務ナノダ」

あつさりと肯定されてしまった。

ちらと視線を動かして心亜先生を見れば、彼女は口元をわなわなと震わせ、壱条を見返している。その瞳には困惑の色がありありと浮かんでいた。

(いろいろな意味で魅力的な人なんだけどな)

壱条は自身の担任教師の観察を続ける。

細身でありながら出るところはしっかり出ている肢体。濡れ羽色の艶やかな黒髪に、ぷるんとした桜色の唇。透き通るような白い肌を持つこの年上の女性は、壱条にとって瑞々(みずみず)しい果実そのものである。

そんな女性が、自分と子作りをする――。

そう考えただけで、心臓がバクバクと音を立てて暴れ出し始める。

(いや待て！ 落ち着け俺！)

壱条は必死に邪悪な欲望を律し、昂ぶる気持ちを鎮めた。再び視線を動かして観察する先は、蛭沼である。

二メートルに迫るとんでもない巨体。丸太のように太い手足は、ステロイドでも摂取しているのかと思わせるほど。ハスキーボイスでしゃべるたびに覗く犬歯は鋭く尖り、口から吐き出される息はまるで獣のようだ。

(こんなのと抱き合った日には圧殺されてしまう！)

一瞬で血の気が引いた壱条は、心亜先生と同じくわなわなと唇を震わせた。

と、ひとり平静を保っている蛭沼が、

「なるほど。それは嬉しいことではないな」

「ドウイウコトダ？ 生物ハ交尾ニ官能ヲ覚エルヨウニ設計サレテイル」

宇宙人がスピーカー越しに問い返す。

蛭沼が、ふんっ、と大きく鼻息を吐き出した。

「意中の相手との行為ならそうだろうな。だが、そうでない場合は苦痛も伴う」

「安心シロ。我々ハ脳内ノ性的欲求回路ヲ刺激スル術ヲ持ツテイル。イマ、君タチガ覗イタ部屋ノ男モ最初ハ嫌ガツテイタガ、脳内ノ性的欲求回路ヲ刺激シテヤレバコノトオリダ」

「ほう？」

宇宙人の返答を聞いた瞬間、蛭沼の双眸がキラリと光ったような気がした。

「ところで、地球から救出する人間はどんな基準で選んでいる？ これからも救出する予定はあるか？」

「適当ニ座標トシテ指定シタ場所ガ、君タチノ学園ダツタ。ソノ近辺ニイル人間デ、アト数人ハ欲シイトコロダ」

「種の保存とやらに協力する代わりに、オデの希望を叶えてもらうことは可能か？」

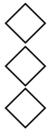
「ずいつ、と一步前に進み出た蛭沼に対し、ロボット型の異星人は、いつとぎの間を置いてから、

「病氣ヲ持ツテタリ、ゾンビニナツテタリシナケレバ可能ダ」

と答えた。

それを聞いた蛭沼は口の端を大きく吊り上げる。

「ならば救い上げてほしい人間がいる。オデの恩人で……」



壺条と心亜先生と蛭沼は、宇宙人の案内を受け、子づくりをするための空き部屋に足を踏み入れた。そこは四方を真っ白な壁に囲まれた、十畳ほどの空間だった。中央には、キングサイズのベッドが鎮座しており、その脇のテーブルにはウェットティッシュやタオル、そして性交を円滑に進めるためのローションなどが用意されていた。

「なんかイカニモな部屋……」

げんなりした様子でつぶやく心亜先生は、湯浴みを済ませてバスローブ姿になっている。ほんのりと上気した肌がなんとも艶めかしい。豊かな胸の谷間は深い溪谷を描き、すらりと伸びた脚線美もまた蠱惑的だ。

(ヤバイ。油断すると勃ってきそうで……)

一方の壺条も腰にバスタオルを巻きつけただけの格好をしており、逞(たくま)しいとも貧

相ともつかぬ体軀を露わにしていた。

「ココデフタリニハ睦ミ合ッテモラウ」

ロボット型の宇宙人が、事務的に告げてくる。

壺条が蛭沼ではなく心亜先生と子づくりをするというのは、先ほど彼自身が提案したことだった。理由はともあれ、女性のどちらかと性交渉をしなければならぬことは決定事項になってしまったので、迷わず彼女を選んだというわけである。

無論、心亜先生は難色を示した。宇宙人に詰め寄り、「人道に反している」とか「これはあなたたち宇宙人のためにも言っている」などと抗議をしたのだが、簡単な「武力行使」を受けて引き下がらざるを得なくなった。

かくして、壺条と心亜先生のふたりは、ベッドの上に並んで腰掛けていたわけのだが――

「性交の進行に合わせて、現在の地球の……学園の様子を映してくれると約束してくれていないはずだ」

蛭沼が宇宙人に対して、凄むようにして訊いた。

心亜先生もすかさず、

「私たちが指定した人物を地球から連れてくる約束、忘れたとは言わせないから」と、強い口調で畳みかける。

その間、壱条だけはしよんぼりと首(こうべ)を垂れていた。

ふたりの主張する内容は、地球から救い上げる対象人物についてだった。蛭沼が救出要請した人物は風谷奏(かぜたに かなで)という悪い噂の絶えない生徒であり、心亜先生が救出要請した人物は丸渕正義(まるぶち せいぎ)という数学教師である。壱条にも指名権はあったが、救出要請した人物はすでにゾンビ化しており、指名権は再度与えられることはなかった。

「ヨカロウ。君タチノモチベーション維持ノタメニモ、少シダケ様子ヲ映シテヤル」

ロボット型の宇宙人はそう告げると、壁の一面に向かって腹部から光線を発射した。すると、たちまち壁には映像が浮かび上がり、学園の様子が明らかになる。

最初に目に飛び込んできたのは、おびただしいゾンビの群れ。その大半は学園指定の制服姿で、生徒たちの成れの果てであることが窺える。彼ら彼女らの顔面は青白く、生気のない虚ろな表情を浮かべており、中には白目を剥いて口から泡を吹き出している者の姿もあった。

「なんて興味深……じゃなくて惨(むご)い……」

心亜先生の口からかすれた声がこぼれ落ちる。だが、それでも目を背(そむ)けることはない。

続いて映し出されたのは、体育館になだれ込む大勢のゾンビたちだった。どこかの扉が破られてもしたのか、籠城していたと思しき教師や生徒らが続々と襲われている。ある者は首

筋を噛み付かれ、ある者は腕を噛まれ、またある者は押し倒されて股間部へと顔を突っ込まれ……。

『痛いっ！ やめて、やめて、やめてえ！』

『噛まれたら感染するぞ。絶対に逃げろー！！』

『ニョアアアア！ 痛い！ 助けてくれえええええ！』

凄惨な光景が繰り広げられていくとともに、宇宙人の頭部にあるスピーカーからは恐怖におののく悲鳴が鳴り響いている。

と、壱条はゾンビの一群に異様に動きが速い個体が混じっていることに気づく。

「あれは……？」

「アレハ突然変異種ダヨ。非常ニ危険ナ個体デ、運動能力ガトテモ高インダ」

心亜先生がぐくりと息を呑む気配があった。それからすこし置いて、

「オデたちが救助要請した人物を見せてくれないか？」

蛭沼の事務的に問いかけた。これに宇宙人は、

「チョット待チナ。イマ探シテイルトコロ……イヤ、見ツカッタヨウダ」

と答えて、投射する映像を切り替える。続いて映し出されたのは、廊下を駆ける四人の男女の姿。そのうちの三人には、壺条にも見覚えがあった。

「丸渕(まるぶち)先生と、風谷奏(かぜたに)かなで)さんと、えっと南沢あたり(みなみさわあたり)さん？ あとひとりの白髪(しろかみ)の男は誰？」

疑問を口にするると、壺条の隣に座る心亜先生が、

「銀城剣(ぎんじょう)君。メラニン色素(メラニン色素)の関係で、生まれつき髪(かみ)の毛(け)だけが真っ白(しろ)なの。奇抜(きばつ)なビジュアル(ビジュアル)で有名(有名)なのに、知らなかったの？」

と教えてくれた。

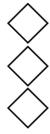
そんなやり取りをしている間も、画面の中の四人は廊下を走り続けている。後方からゾンビに追われ、どうやら前方にも立ち塞がっているゾンビがいるようだ。

と、丸渕先生が横手の扉を指し示すと、四人はいっせいにそこへ飛び込んだ。LL教室と名付けられたその空間は、普段は英語の授業で使用されている部屋だ。

『施錠してください。あと、みんなと一緒に柵を倒してバリケードを作りましょう』

丸渕先生がテキパキと指示を飛ばし、残る三人もそれに従って行動を始める。

ほどなくしてバリケードを築くことはできたものの、出入り口の扉をたたく音は次第に大きくなっていく。四人は息を呑んで、扉の様子をじっと見つめていた。



「トリアエズココマデカナ？ サア、今度ハ君タチガ続キヲ見セル番ダヨ」

宇宙人が言い終えた瞬間、投射映像がぷつりと途切れる。

蛭沼は床を蹴りつけて、悔しげに吐き捨てた。

「クソツ。大事な場面だろうが」

「あなたは何もしなくていいんだから、いいご身分よね」

心亜先生が、冷ややかに言い捨てる。視線もまた氷のように冷たく、隣にいる男子生徒を射抜くように見据えていた。

そんな棘のある視線を受け止める壺条はというと、期待に満ちた眼差しを宇宙人に向けている。

（さあ、早く具体的な指示をくれ！）

隣に座る女性を押し倒す度胸もなければ、相手の気持ちを確かめるだけの甲斐性もない。

壱条は無理やり性交させられているという無責任な免罪符をもって、心亜先生の身体を貪(むさぼ)らんとしていた。

「サツサトシロ。マズハバスローブヲ取り払ツテ、オ互イノ身体ヲ愛撫スルノダ」

「は、はい。仕方ないなあ」

壱条はいやいや従っている風を装って、いそいそとバスローブを脱ぎ去った。股の間に鎮座する男根は、すでに臨戦態勢にまで勃ち上がっている。

「さつきからテントを張っているなどは思ってたけど……」

心亜先生の胡乱な視線がそこに注がれると、壱条は慌てて両手で覆い隠した。しかし、指の隙間からぴよこんと飛び出たペニスの先端が見え隠れしていて、かえって滑稽さを際立たせてしまっている。

「いや、これは生理現象で。男の本能なんで」

取り繕うように言い訳をする壺条であったが、心亜先生はそれを黙殺すると、バスタオルの結び目を解き始めた。しゅるりと解かれたタオルが床に落ち、彼女の裸体があらわになる。

(おおお……っ！?)

壺条は生唾を呑み込んだ。

思わず見とれてしまうほどの双丘がふたつ、女教師の動作に伴ってたぷんと揺れ動いた。

やや乳輪が大きく先端の突起も陥没気味で、持ち主の繊細な顔貌とは対照的な淫靡な雰囲気  
を醸し出している。

(澄ました顔でこんなおっぱいぶら下げてるなんて、エロ過ぎだろ……！)

鼻の下を伸ばしながら、壺条は観察を続けるべく視線を落としていく。

ほっそりとしたウエストから臀部にかけての曲線美には、得も言われぬ艶めかしさが漂っていた。そしてその先には整えられた陰毛がふんわりと繁茂するヴィーナスの丘があり、さ

らにその下には……。

(くっ……。前傾姿勢で脚を閉じ合わせているから、肝心なところが見えないじゃないか)

恨めしそうに見つめる視線の先では、乙女の秘所を守るようにして太ももがぴったりと閉じられている。まるで壺条を拒絶するかのようになり、奥に隠れているはずの女陰は息をひそめていた。

「宇宙人に愛撫しろって言われてるので、失礼しますね」

壺条は遠慮気味に告げると、半身を捻って隣に座る心亜先生に両手を近づける。指先が触れるか触れないかといったところで、

「それが年上に対する態度？」

急に心亜先生に冷たい声を浴びせられた。汚物でも見るような目つきで牽制され、ビクッと硬直してしまう。

「えっと、すみません。どこか直すべきところでもありましたか？」

「説明されないと何もわからないの？」

「え あ、ああー……」

壺条は困惑しながら蛭沼や宇宙人のほうに視線を向けるが、ふたりは素知らぬふりをして立っているだけで、助け舟を出してくれる気配はまるでない。

仕方なく、心亜先生に視線を戻すと、

「あなたのためを思っているの」

と、叱責の言葉が飛んできた。

(なんかマズいことでもしちゃったのかな)

壺条はしどろもどろになりながらも、サイドテーブルに置かれたローションボトルを手にとって、中身を手のひらに垂らし始めた。潤滑液はすでに人肌程度に温かく、これならすぐ

に使えるそうだと判断して、おそろおそろ心亜先生へと手を伸ばす。

「……………」

唇を引き結んで、何か言いたげな心亜先生だったが、結局なにも言わずに壺条の手が胸部に近づく様を眺めていた。

——ぬちやり。

潤滑液が卑猥な音を立て、乳房の表面を濡らしていく。粘度の高い液体が肌を伝い、谷間に向かってゆっくりと流れ落ちていく様子は実に官能的だ。

「私があなたくらい年齢のときには、もっと甲斐性のある男子がいっぱいいたはずなんだけど」

心亜先生は腹部に向かって零(こぼ)れ落ちていく潤滑液を手のひらで受け止めると、身がかがめてパートナーのブツに塗りたいと思った。

「うおっ!？」

壺条が突然の刺激に驚いたのもつかの間、今度は竿全体を包み込むように手が伸びてくる。そのまま上下にスライドされると、ぬるぬるした感触が心地よく、たちまちのうちに射精感がこみ上げてきた。

「こ、これっヤバイ……っ!」

このまま果ててしまつては格好がつかないので、齒を食いしばって耐え忍ぶ。

それでも心亜先生の手は容赦なく動き続け、技巧的な手つきで否応もなく興奮を高めてくる。人差し指で裏筋をなぞられ、親指で鈴口をくすぐられ、さらには手のひら全体の動きでカリ首を執拗に擦り上げられると、もう我慢ならなかった。

「あ、やばっ、イ、イクツ……!」

壺条は担任教師の手管に導かれるまま、情けない声をあげて達してしまった。どくんどく

んと脈打ちながら精液が飛び散っていく先には、宇宙人の機械の身体がある。

——べちよ、べちよ、べちより。

粘着質な音を立てて飛び散った白濁が、無機質な金属の塊に付着していく様はなんとも異様な光景であった。

「おおう……まさか宇宙人の身体にぶっかけるとは、すごい根性だね」

先ほどまで竿を握っていた心亜先生は、涼しい顔でウェットテッシュを手に取り、自らの手を拭き取っている。一方の宇宙人は微動だにせず静止したままであるものの、やはり気に障るものがあつたのだろう。

「映像ノ続キヲミセテヤロウト思ツタガ、ワタシノ身体ヲ清潔ニスルマデオ預ケダ」

頭部のスピーカーから不満そうな声を発し、ぷいと機械の身体を背けてしまった。

蛭沼が小さく息を吐き、ウェットティッシュを手に取った。それからやや乱暴な手つきで

はあるものの、素早く効率的に白い粘液を拭っていく。

「ヨカロウ」

壱条が我に返った頃、宇宙人は再び壁の一面に向かって光線を射出していた。映し出された映像は、どうやら学園のLL教室らしい。丸渕先生ら四人が十字に向き合って口論している。



『こんなところに逃げ込んで、袋の鼠じゃねーか！』

勢いよくまくし立てているのは、白髪の男子生徒——銀城剣（ぎんじょう つるぎ）だった。すらりと背の高い美男子で、いかにも女子受けしそうな剣呑な雰囲気をもっている。

『確かにその通りです。ですが、廊下の前後からゾンビに挟まれてしまったとあっては、ここに逃げ入るより他に選択肢はなかったでしょう』

落ち着いた声で反論するのは、数学教師の丸渕正義(まるぶち せいぎ)だった。背丈は銀城よりも低く、細身というかスリムな体型をしている。眼鏡をかけたその顔は理知的で、生徒からの信頼も篤(あつ)いが、授業は厳しいことで有名だ。

『じゃあどうすんだよ。木扉はガンガン叩かれ、いまにもへし折れそうな音がするしよお!』  
銀城は苛立たしげに言い、教卓に拳を叩きつけた。鈍い音が響き渡ると、

『ひいっ!?!』

ひどく怯えた声があがった。声の主は黒い髪を長く伸ばした女子生徒——南沢あたり(みなみさわ あたり)である。小動物を思わせる可愛らしいその顔は、いまは恐怖によって完全に歪められてしまっている。

『どうせ人類は終わりだろ。俺たちも死ぬ。なら——』

銀城はそこで言葉を切り、ミディアムカットの髪を金に脱色した女子生徒——風谷奏（かぜ）にかなで）に向き直った。ひよいと腕を伸ばし、着崩した制服越しに肩に手を置くと、

『俺とセックスしてくれないか？』

『はあ？』

奏が柳眉を逆立て嫌悪感をあらわにしたのと同時に、銀城がもう一方の腕を彼女の胸に運んでいた。

しかしそれを阻むかのように、眼鏡の数学教師が割って入った。

『それ以上は許しませ——ふごおおおおっ！？』

言いかけたところで、丸渕は奇妙な悲鳴をあげてその場にくずおれた。銀城に股間を強く蹴り上げられたのである。

『おおおおおん……っ！ お、おふうう……っ！』

哀れな数学教師は苦悶の声を漏らし、床上で悶絶する。唇の端からは白い泡を噴き出し、おり、その苦痛の大きさを残酷に物語っている。

『きゃああああっ！』

他方、もうひとりの女子生徒である<sup>ニ</sup>あたり<sup>ニ</sup>は黒髪を振り乱して甲高い悲鳴を発していた。

二、三步あとずさり、現実逃避でもするみたいに両手で自分の目を覆っているが、指の隙間から覗く瞳は大きく見開かれている。

『さあ、邪魔者は消えた』

銀城は満足げな笑みを浮かべ、床にうづくまる丸渕を足蹴にしてどかした。

奏から股間目がけた蹴りが飛んできたが、紙一重のところをそれを見逃（かわ）すと、逆に相手の胸ぐらを掴み、強引に床に叩き伏せる。

『痛っ……!!』

背中を打った衝撃で顔をしかめる奏に、銀城は覆い被さるようにして顔を近づけていく。鼻先同士が触れ合い、

『さあ、人類最後の営みを始めようか!』

鼻息荒く言い放った銀城が大写しになったところで、映像が途切れた。



『サア、ココマデダヨ。君タチモ人類ノ営ミヲ再開シナヨ』

宇宙人の機械的な音声を聞いて、壱条は思わず顔をしかめた。

(どんな情緒で次の映像を見ればいいんだよ)

欲望を吐き出し終えて清い心になった壹条は、複雑な思いで壁を眺めていた。先ほどまで映像が投影されていた場所は、いまやただの白い壁に戻ってしまったている。

「丸渕先生はちよっと心配だけど、風谷さんがどうなろうと知ったこっちゃないかな」  
壹条の隣に座る心亜先生がぼつりと呟いた。

「むしろ銀城君頑張れ〜って感じ？ 私、あの風谷って子に反発されて、けっこうムカついているの。金持ちっただけで優遇されてさ」

「なぬ」

この発言には、壹条だけでなく蛭沼までもが驚きを禁じ得なかったようだ。

「看過できぬ言いぐさだな。オデが奏さんを救助対象に選んだことを忘れたか？」

「忘れてないけど。蛭沼さんこそ、私が救助対象に選んだ丸渕先生を窓から放り投げたこと、覚えてる？」

心亜先生と蛭沼が睨み合うなか、壱条はひとり暗澹たる思いに囚（とら）われていた。

（俺が救助対象に選んだ幼馴染はもうゾンビ化してたんだぞ……再指名権も与えられなかったし……）

そうこうしているうちに、痺れを切らしたと見える宇宙人がざらついた音声を発し、

「サツサト性交渉ノ続キヲシロヨ。約束ヲ果タサヌノナラ、コチラモ約束ヲ守ラヌゾ」

高圧的に言い渡され、蛭沼はしぶしぶといった様子でベッドに背を向けた。

心亜先生は大きくため息をつくと、壱条の下半身に視線を落とす。≡そこ≡はすでに完全に萎えてしまっており、だらりと力なく垂れ下がっていた。

「自分でなんとかできない、それ？」

そんなふうに見えられても、壱条はゆっくりとかぶりを振ることしかできなかった。

「いえ、全然そんな気分にならないんです。こう、なんていうか、もう出し切った感があっ

て……」

「ナラバ脳内ノ性的欲求回路ヲ直接刺激シテヤルコトニスル。先ニ来テイタフタリノヨウニ」  
だしぬけに宇宙人がそんなことを言い出したので、壱条はぎよつとした表情になる。

拒絶の言葉を紡ぐ猶予もなかった。数瞬ののち、視界がピンク色に染まったかと思うと、強烈な快樂電流が身体中を駆け巡った。全身の血液が沸騰するような興奮が沸き起こってくる。

（な、なんなんだ。この感覚……！）

どうやら視界がピンク色に染まった原因は、宇宙人の頭部に備わるふたつのレンズにあるらしい。そこから照射される光が視神経を介しているのか、はたまた肌を介しているのかは知れないが、脳の中枢を激しく揺さぶってくる。まるで媚薬を打たれたかのような、尋常ではない高揚感が押し寄せてきた。

——ドクンツ！

心臓が一際大きな鼓動を打ち鳴らせば、股座の粗末なモノがたちまちのうちに屹立していた。

——ドクンツ、ドクンツ、ドクンツ！

心臓のリズムに合わせて、とんでもなくムラムラした衝動に襲われる。

「はう、あ、あ……っ、や……なんで、私まで……？」

心亜先生もまた、壺条の隣で巻き込まれる形でピンクの光を浴びせられていた。頬を紅潮させながら、熱っぽい吐息を漏らしつつ、しきりに太ももを擦り合わせている様は実に艶めかしい。

——ズキンツ！

壺条の下腹部が疼く。ペニスの付け根辺りが痛いくらいに張り詰めているのがわかる。辜

丸のなかで、熱いものが渦巻いているような感覚があった。早く吐き出したくて仕方がない。だが、同時に試してみたいこともあった。壹条は克己してベッドの上に身を乗り出すと、素早く心亜先生の背後にまわり込んだ。

「っ、なに……？」

相手の両脇に腕を差し入れ、羽交い締めのを要領でがっちり固定する。背中に勃ち上がったソレを擦りつけながら、ピンク色の光をほとんどひとりに浴びせ続ければ、

「やっ……ちょ、ちよつとお……っ！」

ほどなくして甘い悲鳴があがった。壹条は心亜先生のうなじや耳の裏に鼻を寄せ、匂い立つ芳香を吸い込みつつ、さらに腰を前後に動かして相手に硬いものを意識させてやることにした。

「んっ、やあ、あっ、ああん……！」

切なげに啼きながらも、心亜先生は必死に抵抗を試みているようだった。身体をよじって逃れようとするも、壱条はそれを許さない。

(このままイクんじゃないか)

壱条が嗜虐的な悦びに口角を歪めたときだった。

ふいに蛭沼のだみ声が宇宙人を制する。

「ふたりともすっきり出来上がってる。だからさっさと映像の続きを見せろ」

すると、宇宙人はピンク色の光の投射をやめ、ゆるりとした所作をもって白い壁に向き直った。

「イイダロウ」

そして先ほどまでと同様、壁に映像を投影し始める。

映し出されたのは、やはり学園のLL教室の光景だった。